うずまきナルト物語

御庭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
うずまきナルト物語

【Ｎコード】
Ｎ１６９４ＢＡ

【作者名】
御庭

【あらすじ】
産まれた時に見た記憶。

産まれて直ぐに血の海に流した涙。

いつか…本当の笑顔を出せれるか…今はまだ…分からない、

1

オレの名前は”うずまき　ナルト”
今、三代目火影のじーちゃんにお願いがあって…じーちゃんの処に来ている。
ナルト「じーちゃん！オレも忍者養成学校（アカデミー）に入りたいってば！」
三代目「ナルト…お主はまだ３つじゃ…早すぎる」
ナルト「えーっ！オレってば、じーちゃんみたいな強くて優しい忍びになりたいんだってばよ！」
三代目「ナルト…ダメじゃ…」
少し嬉しそうにするじーちゃんだが、まだ折れない。
ナルト「じーちゃん…お・ね・が・い・だってばよ！」
下から目線でじーちゃんを見上げる。
三代目「…ぅ…だ、ダメじゃ！…しかし…なんじゃ…条件を出してやるから…その条件を守れたら…許可しよう」
じーちゃんは眼をキョロキョロさせながら言った。
ナルト「ホントー！んじゃあ！条件を聞かせてくれってば！オレってば！守るから！」

三代目「そうか…では…」
オレはじーちゃんの出した条件を聞き、その後、一人暮しをする事になった。

じーちゃんが決めたアパートに行くと家の中には何も無い状態の部屋に一枚の封筒がおいてあった。

封筒を開けると”うずまき　ナルト”と書いてある通帳と手紙が入っていた。

手紙の内容は…

”うずまき　ナルトへ

この通帳はお主の両親がお主の為に残したお金が入っている…何に使うかはお主が決める事じゃ…ただ、考えて使えよ

三代目火影”

っと書かれていた。

手紙を閉じ、通帳を開くと

”５０．０００．０００”両

と書かれていた。

ナルト「”５０．０００．０００両”ってば…多いってばよ？…計画的にしないとな…まぁ、まず…冷蔵庫、洗濯機、鍋、フライパン…野菜と魚…肉は…良いや…後は…歯磨き粉、歯ブラシ…後専用のコップで良いかな？…服は…動きやすい服と寝巻き、冠婚葬祭とか言う専用の服と…まぁ１０着以内で考えよう…後は…ノートや鉛筆、消しゴム…巻物…筆で良いかな」

そう言いながら商店街で買い物をする為に、靴を履いた。

ナルト「よし、行ってくるってば！」

商店街

商店街を歩いていると、里の何人かの大人たちがオレを睨みながら何か言っていた。
大人「”化け物”がのん気に歩いてんじゃねぇよ」
大人「おぃ！小さい声で言えよ！聞こえちまうぞ！」
オレはその大人たちの側に行き見上げる。
そして小さい声で…
ナルト「ねぇ？おじさん達？オレの中にいる”九尾の尾獣”に会いたいの？」
大人「っ！？な、何故その事を知っている…禁句な筈！」
ナルト「何故？そんなモン最初から知ってるってばよ？大人たちのオレに対する眼を見ればな！んで？会わしてあげようか？”九尾の尾獣”に」
大人「な、何言ってんだ！」
ナルト「安心しろってばよ？…オレってば”九尾の尾獣”のチャクラコントロールなんかもう出来るからな！…オレがキレたらどうなるか…分かってるよな？」
オレは大人たちを殺気混じりに睨みあげた。
大人「す、すまなかった！許してくれ！」
大人たちは尻尾を振りながらその場を逃げた。

九尾【ナルトよ…聞こえるか？】
ナルト（あぁ、聞こえるってばよ…なんか用か？九尾）
九尾【あやつらが行った方角は…三代目の屋敷だぞ？良いのか？】
ナルト（ん？良いんじゃない？…それより…九尾？巻物って何処に売っているか分かるか？）
九尾【…巻物？何に使うんだ？】
ナルト（まぁ…買い物した物を時空間忍術（ジクウカンニンジュツ）で入れようかなぁって思ってる…流石に持ちきれないからな）

九尾【多分…彼処にあるんじゃないか？】

オレは九尾が教えてくれた場所に行くと色々な武器が並べられた店があった。

店主「ん？なんだ？ナルトじゃないか？どうした？」

ナルト「巻物あったら買いたいんだけど…おっちゃん…ある？」

店主「巻物？あるぞ！…でも何に使うんだ？」

ナルト「んと、ノートに使えないかなって…墨入りだと嬉しいんだけど」

店主「墨入り巻物か…後１つで終わりだが？」

ナルト「じゃあ、墨入り巻物１つと普通の巻物４つ…買う」

店主「あんがとな！ナルト！」

そうして巻物を買い、ついでに筆もなってその場を離れた。

ナルト（さて、次は…家具屋で買い物するか）

九尾【ナルト？時空間忍術（ジクウカンニンジュツ）はいつやるのだ？】

ナルト（ん？あ…後でやるつもり）

家具屋

ナルト「こんにちは？」

店主「ん？ナルトか？なんか用か？」

ナルト「オレってば！一人暮らしする事になったんだ！でさ、家具買いに来たんだけど…今大丈夫ってばか？」

店主「あぁ、大丈夫だぞ！…しかしナルト…お前まだ３つじゃないか？」

ナルト「そうなんだけど…オレってば…里の大人たちに憎まれてるみたいだからさ…三代目のじーちゃんに迷惑かけられないって思っ

て…じーちゃんに頼んだんだってば！」
店主「…ナルト…よしっ！今日は特別サービス！無料でお前の新しい部屋に運んでやる！」
ナルト「え！悪いってばよ！おっちゃんにも迷惑かけたくないってば！」
店主「何言ってんだよ！ナルト！お前に家具を持たせる訳にはいかないからな！」
ナルト「だって…おっちゃん…店…」
店主「小さい事は気にすんな！俺はもう決めたからな！」
ナルト「じ、じゃあお言葉に甘えさせて貰うってばよ！おっちゃん！ありがとうってば！」
店主「で？何が欲しい？」
ナルト「んと…ソファと机と本棚…ソファはベットがわりになりそうなヤツが良いな…」
店主「んじゃ！これなんかどうだ？お前が成長したらベット買わんといけなくなるが…当分はそんな事気にする事が無いと思うぞ？」
ナルト「ちょっと寝てみて良いってば？」
店主「あぁ！良いぞ！」
おっちゃんの言葉に頷き横になってみると体を伸ばしても余裕があった…何より寝心地も良かった。
ナルト「じゃあ、これにするってばよ！色はこの色も気にいったでば！」
店主「よっしゃ！これを荷台に積む…他はどれが良い？」
その後机と本棚を買い、一時おっちゃんと家に戻った。
帰り際、やっぱりお金を払わないとなぁと思い、内緒でおっちゃんのポケットにお金を入れた。

その後、時間をあけて再び商店街に行くと家具屋のおっちゃんがオレを探していた。
気配を消しながら八百屋と魚屋、電器屋に行き、買い物を済ませた。

九尾【ナルト】
ナルト（どうしたんだってば？）
九尾【服は良いのか？】
ナルト（…忘れてたっぱね！…明日買いに出るか）

※因みに電器屋のおっちゃんがオレの家まで電器家具を運んでくれた…しかも又無料で…まぁ、内緒でおっちゃんのポケットにお金を入れました。

2

一人暮らしをして1週間が経った時、オレは三代目のじーちゃんに呼ばれた。

三代目火影の屋敷

三代目「…ナルトよ、何故呼ばれたか…心当たりはあるかのぅ？」
ナルト「”九尾の妖狐”を何故知っているか？とか」
三代目「そうじゃ！何故知っている？誰に聞いた？」
ナルト「…こいつに聞いた…口寄せ・九弧（キュウコ）！」
三代目「っ！？」
九弧【ナルト…何か用か？】
三代目「お前は”九尾の妖狐”？」
九弧【ん？誰だ？貴様は？…俺様を妖狐と一緒にすんじゃねぇ！俺は九弧だ！】
ナルト「じーちゃんが”九尾の妖狐”と間違えるのも無理が無いな…何せ九弧は”九尾の妖狐”と瓜二つだからな…オレの父さんと母さんの事も九弧に聞いた…それに九尾については今は陰封印（インフウイン）と契約（ケイヤク）封印（フウイン）でチャクラをコントロールしているかな…多分大丈夫」
三代目「封印術はどうやって覚えた？」
九弧【俺様が教えた…俺様はうずまき一族と古くから契約しているからな…封印術も扱えるぞ】
三代目「そうなのか…では、ナルト…お主は本当に”九尾の妖狐”と和解しておるのか？」
ナルト「あぁ…している」

三代目「そうか…それだけ分かれば良い…時間を取らせたな」
ナルト「別に良いってばよ！」
九弧を消し、オレは三代目の屋敷から立ち去った。

帰り道

九尾【ナルトよ…聞こえるか？】
ナルト（あぁ…どうした？九尾）
九尾【暗部（暗殺戦術特殊部隊（アンサッセンジュツトクシュブタイ））の奴がつけているが…どうする？】
ナルト（…さて？どうしようかな？…無視した方が楽かな）
九尾【分かった】

アパート

部屋に入り、ソファに寝転んだ。
ナルト「…あ！服…買いに行かなきゃ！」
思い出したように又、外に出る。

商店街

服屋に行き、動きやすい服と寝巻き、冠婚葬祭とか言う専用の服と…まぁ１０着程買う。
服屋を出て歩いていると…花屋が目に入った。

ナルト「花…買お！」

花屋「花・やまなか」

花屋に入り、色とりどりの花を見て回る…フッとある植物に目が留まった。
ナルト「ねぇ…おっちゃん？あね植物何？」
店主「ん？アレは…”エバーフレッシュ”は”ネムの木”とも言われる…その由来は夜になると葉っぱがパタリと閉じて眠ってしまうから…まぁ…本当は葉っぱからの水分の蒸散を少なくする為だとか言われるかな…成長期は春～夏にかけて、新芽がグングン出てくるよ。新芽は赤茶色で段々ときれいなグリーンに変身していくな！後…鉢の土の表面には飾り石を敷いたりしてインテリアにも最適だよ！…日陰にとっても強く、育てやすい観葉植物だから…しかも冬に落葉しないよ！」
店主は早口でオレに話し始めた。

話が終わった後、オレは”エバーフレッシュ”を購入した。
店主「ありがとな！坊主！」

アパート

部屋に戻り”エバーフレッシュ”を日陰に置く、買ってきた服を出し、値札（タグ）を外して壁にかけて置く。
ナルト（…明日は、多重影分身（タジュウカゲブンシン）を放って修業するってば）

アパート

朝早く動きやすい服を着て、修業の準備をする。
ナルト（…弁当作ろう）
炊事場に行き、冷蔵庫から食材を取り出す。
ナルト「…取り敢えず朝ご飯と一緒にすれば早いか…卵は一日1個にする予定だから使わなくて良いや」

ご飯を炊き→おにぎりを作る
魚の切り身→塩焼きにする
野菜を切る→塩茹でにする

弁当箱に料理を詰めていく。
※何故か3つ（理由は後に分かります）

九尾【ナルト…屋根裏に気配があるぞ？】
ナルト（あぁ、分かってる…修業を悟られないようにしなきゃな）
九尾【しかし…三代目の事だ…遠眼鏡（トオメガネ）の術で分かってしまうぞ？】
ナルト（…だよな…さて、どうするかな…狐狸心中（コリシンチュウ）の術（ジュツ）をかけとくかな）

演習場

演習場に行き、狐狸心中（コリシンチュウ）の術（ジュツ）をかけた後、オレは多重影分身（タジュウカゲブンシン）をし、

修業を行った。

ナルト（…口寄せ・九弧（キュウコ）！）

九弧【なんだ？ナルト！】

ナルト（頼みがある…此れから”うちは一族”に行き…サスケとイタチを連れてきてくれ…痕跡は残さないでくれよ？）

九弧【あぁ…分かった】

九弧が行ったのを確認をする。

九尾【ナルト…”うちは”には…】

ナルト（あぁ…分かってる）

数分後

イタチ「君が僕たちを呼んだのか？」

演習場にイタチとサスケがやって来た。

ナルト「あぁ、実は…一緒に修業がしたかったんで…嫌なら帰ってもらっても…構いませんよ？」

オレの言葉に少し考えた素振りを見せるイタチ。

イタチ「…サスケも誘った理由は？」

ナルト「サスケはイタチさんと修業がしたいと感じている…オレはイタチさんとサスケとも修業したいからな…一石二鳥の考えをしただけだ…」

イタチ「そうか…分かった…そういえば…君は？」

ナルト「ん？あぁ、まだ名乗っていなかったな？…オレはうずまきナルト…まぁ…里では”化け物”扱いされている…まぁ”九尾の妖狐”憑きだ」

イタチ「君が？…でも、禁句と言われている筈…」

ナルト「あぁ、三代目のじーちゃんにも同じ事を言われた…まぁいずれは話します」

イタチ「分かった」

ナルト「サスケ！宜しくってばよ！」
サスケ「宜しく」
挨拶を交わし、オレは二人に勝負をかけた。

ナルト「（影）分身の術！」
オレは分身体を5体だし、４人をイタチに、１体と本体をサスケにわけた。

サスケと修業

イタチとサスケの距離をあけ、話しかける。
ナルト「サスケ、お前にオレが知っている”ある術”を教える…”陰封印（インフウイン）・解（カイ）”っていう封印術だ」
サスケ「？なんで解（カイ）なんだ？」
ナルト「いずれ分かる…何故オレがお前にそれを教えたのか…な」
サスケ「分かった…他は？」
ナルト「んー、そうだな？…影分身（カゲブンシン）の術を教えておく！」
サスケ「影分身？」
ナルト「あぁ、これは禁術とされている術だ」
サスケ「禁術…何故お前が出来る？」
ナルト「…それは禁則事項（キンソクジコウ）で言えない」
サスケは納得していないようだった。

イタチと修業

イタチとサスケの距離をとった後、分身体がイタチに話し掛けた。
ナルト「イタチさん…貴方に”ある術”をかけさせてもらう」
イタチ「ある術？なんだい？」
ナルト「その前に…”天照”は使えますか？」
イタチ「っ！？…ナルト君、君は一体何者なんだい？」
ナルト「…使えるかって聞いているんですが？」
イタチ「…まだ万華鏡写輪眼ではないので使えないよ」
ナルト「そうですか…ではまだかけないでいます」
イタチ「何をだい？」
ナルト「今は内緒です」

その後、修業を終えた。
※お昼は３人でオレが作った弁当を食べた。

3

イタチとサスケと修業した翌日、偶然、日向一族の跡目のヒナタに会った。

ナルト「…日向ヒナタさん？」
ヒナタ「え？…誰？」
ナルト「あぁ、オレはうずまきナルトだ…宜しくってばよ」
ヒナタ「よ、宜しくお願いします…あの…何故私の名前を？」
首を傾げながらオレに言う。
ナルト「前に三代目のじーちゃんから聞いたからかな…あのさ！オレはこれから修業する予定なんだ…嫌じゃなかったら一緒にどう？」
ヒナタ「え？修業？…良いの？」
ナルト「うん！良いよ…もしかして予定ある？」
ヒナタ「予定はない！宜しくお願いします」
場所を移動して、オレはサスケ同様…ヒナタに影分身（カゲブンシン）と神楽心眼（カグラシンガン）を教えた。

ナルト「日向一族って体術が得意なんだよな？」
ヒナタ「う、うん…柔拳（ジュウケン）を使うの」
ナルト「柔拳（ジュウケン）…ヒナタは…強くなりたいか？」
ヒナタ「うん、なりたい…父上に認めてもらいたい」
ナルト「…じゃあ、教える」
ヒナタ「え？」

ヒナタとの修業の際、オレは…柔拳法（ジュウケンホウ）・八卦三十二掌（ハッケサンジュウニショウ）と柔拳法（ジュウケンホウ）・八卦六十四掌（ハッケロクジュウヨンショウ）を教えた。

その後、ヒナタと修業を終え、ヒナタを日向の屋敷に送り帰宅した。

アパート

ナルト「…」
オレは瞑想をしながら神楽心眼(カグラシンガン)を使っていた。
ナルト（…はぁ…暗部の人数が増えてきたな…三代目に”嘘”の手紙でも送るか）
瞑想を止めて三代目に手紙を書いた。
ナルト（天送(テンソウ)の術）
手紙を三代目に送った。

手紙の内容

”三代目のじーちゃんへ

暗部の見張り役の数が増えてきたので、じーちゃんに3つの約束をしようと思います。

3つの約束事
1つ、”九尾の妖狐”の力を振るわない
2つ、もし使う場合は里の為に使う
3つ、里を裏切らない

以上
上記の事を約束します。

不満があれば暗部の人に呼び出しを頼んで下さい

うずまき　ナルト

追申、遠眼鏡（トオメガネ）の術でわざわざ監視しなくても良いですよ”

手紙を送ってから、暗部の数は少し減った。

ナルト（…減ったけどまだ15人か…）

オレは神楽心眼（カグラシンガン）で周りのチャクラをみていた。

九尾【ナルト、どうするのじゃ？】

ナルト（んー？どうしようかなぁ…じーちゃんに人数も伝えてみる？）

九尾【効果あるとは思えんが？】

ナルト（だよな！…あー！もぅ！無視無視！…気にしてたら…寿命縮みそう！）

それから毎日、オレはサスケとヒナタと修業をした。

途中まではイタチも修業していたが…暗部に配属されて行った。

※監視はされていません！

因みにサスケとヒナタと3人で修業する際、サスケは何故日向が？っと聞いてきたから…嫌なら帰ってもらっても…っと言うと慌てていた。

呼び出し？

ある日、朝早く日向の人が家に来た。
ナルト「…どうぞ」
部屋に案内する。
日向「朝早くにすまないね？…私は日向ヒアシ…ヒナタの父親だ」
ナルト「ヒナタさんの？」
ヒアシ「実は…ヒナタの事を聞きにきた」
ナルト「ヒナタさんの事？…何ですか？」
オレはヒアシさんの目を見る。

ヒアシ「ヒナタは…私の事を何か言っていたか？」
ナルト「ヒナタさんは…”強くなって父上に認めてもらいたい”と言っていましたよ」
ヒアシ「…認めてもらう…か」
ナルト「はい、オレは産まれた時から両親の事は知りませんので…ヒナタさんの親に認めてもらうっていう意味が良く分かりませんが…前々から考えている事と似ているのかなっと感じました」
ヒアシ「何と似ているんだい？」
ナルト「ヒアシさんは”九尾の妖狐”がオレの中に封印されている事は知っていますか？」
ヒアシ「っ！？」
ナルト「その様子は知っておられるようですね？…オレは”九尾の妖狐”が封印されている為か…里の大人たちに憎まれています…オレはオレだと…分かって欲しい…里の為になりたいと思っています」
ヒアシ「君は…里の人を恨んでいるのか？」
ナルト「オレに”九尾の妖狐”を封印する事によって里が平和ならそれで良いと思います。…それに封印したのは…オレの尊敬する四代目ですから…」
ヒアシさんはオレをジッと見ていた。

ヒアシ「君は…夢はあるか？」

ナルト「夢？…大切なモノの為に命をかけて守りたい…そして、影で見守って生きたいです」
ヒアシ「そうか…き…ナルト君、ヒナタの事を宜しく頼む…」
ナルト「なんかソレおかしいですよ？…オレは勝手にですが、ヒナタさんと友達だと思っています…仲間としてヒナタさんと修業をしていきます」
ヒアシ「有難う…朝早くからすまなかったね」
ナルト「いえ、いつでもきて下さい？歓迎します」
ヒアシ「あぁ、又来る事にするよ」
そう言ってヒアシさんは姿を消した。

ヒアシさんが家に訪ねてきてから2ヶ月後、事件は起きた。

日向嫡子誘拐事件！？

ヒナタの誕生日にオレは偶然遊びに行った。
ヒアシ「やぁ、ナルト君…娘の誕生日にようこそ」
ヒナタ「な、ナルト君…いらっしゃい」
ナルト「ヒナタさん！誕生日おめでとうだってばよ！…コレ！プレゼント！」
オレはヒナタに長細い箱を渡した。
ヒナタ「あ、有難うございます！…開けてもいい？」
ナルト「あぁ！良いよ！…どう？」
ヒナタは箱を開けると「12月の誕生石・ラピスラズリ」のストーンが釵（カンザシ）が入っていた。
ヒナタ「綺麗…有難う…ナルト君」
ヒアシ「ナルト君…有難う…ヒナタ、大切にな」

ヒナタ「はい、父上」

その後、ヒアシさんの弟・ヒザシさんと1つ上のネジさんにあった。
オレはその日、ヒアシさんの提案で日向の屋敷に泊まる事になった。

夜中にフッと目が覚め、神楽心眼(カグラシンガン)で周りを確認すると屋敷に入ってくるモノの気配を感じた。
オレはヒアシさんの部屋に行き、ヒアシさんに”白眼”で見てもらうと、ヒナタの部屋に侵入者を発見した。
直ぐさまヒナタの部屋に行き、侵入者を捕獲し、事件は未遂に終わった。

翌日、アパートに帰る際、ヒアシさんにお礼を言われた。

4

日向の事件から3年が経った。
オレは事件の後、サスケとヒナタと修業に明け暮れ、なんとか過ごしてきた。

サスケとヒナタ、たまにネジを加えて修業をした結果…
サスケは…イタチと最強うちは兄弟とかいわれている。
ヒナタは…何故か”伝説の”強姫。
ネジは…才に恵まれた分家…らしい。
因みにオレは”四代目”と同じ”木ノ葉の黄色い閃光”なのだが…
困った事に5歳の時、親が四代目のミナトとクシナだというのが里にバレた。
イタチとサスケの母親はオレの母親と仲良かったらしく、バレてからはめっちゃ心配してくれるようになった。

あ！今は忍者養成学校（アカデミー）に入学する為にサスケ、ヒナタと三代目のトコに着てます！（笑）

三代目「…ナルト、約束通り忍者養成学校（アカデミー）入学を許可する…サスケ、ヒナタも同じく許可する」
ナルト「有難うございます！三代目！」
※もう”じーちゃん”とは呼んでません。
サスケ「有難うございます」
ヒナタ「有難うございます」

三代目の屋敷から出るとヒナタの世話役・コウさんが門のトコロに立っていた。

ヒナタ「じゃあ、私は此処で失礼するね！バイバイ…ナルト君、サスケ君！」
ナルト「あぁ、じゃあまた！」
サスケ「じゃあな！」

ヒナタと別れた後、サスケと並んで歩く…。
サスケ「ナルト…これから修業しようと思うけどお前も来るか？」
ナルト「ん？別に良いぞ…珍しいな？イタチさんは任務か？」
サスケ「兄さんは…暗部（暗殺戦術特殊部隊（アンサッセンジュツトクシュブタイ））に入ったから」
ナルト「そっか…サスケもイタチさんと暗部に入りたいとか思ってる？」
サスケ「オレは…分からない」
ナルト「分からない？」
サスケ「オレは…兄さんと同じ道に行くのか…それとも違う道に行くのか…悩んでいる」
ナルト「サスケ？なんで悩む必要があるんだ？…イタチさんはイタチさん、お前はお前だろ？…イタチさんにはイタチさんの道があるように、お前にはお前の道があるんじゃないか？…サスケ、お前の夢はなんだ？」
サスケ「オレの道…夢？…考えた事ない」
ナルト「…考えた事がないって…じゃあ！あんな風になりたい！アレをしたい！とか希望はないのか？」
サスケ「…うちはの警務の仕事がしたい」
ナルト「夢あんじゃん！」
オレの言葉にサスケは目を輝かせた。
サスケ「オレの夢！…ありがとう！ナルト！」
ナルト「礼を言われる理由がない」

その日、オレはサスケと遅くまで修業をした。

それからオレたちは忍者養成学校(アカデミー)に入学し、座学や体術、基礎忍術を学んだ。

オレやサスケ、ヒナタは忍者養成学校(アカデミー)のカリキュラムは入学前に終わっていた為”今更”っと感じていた。

”猪鹿蝶”のメンバーとはプライベートでも良く過ごすようになったり、犬塚キバや油女シノと仲良くなったりした。

しかし、そんな平和な瞬間はある事により壊れた。

あの日オレはサスケとヒナタと忍者養成学校(アカデミー)の帰りに修業をしていた。

ナルト（ん？）

オレは何か嫌な予感が頭によぎった。

サスケ「どうかしたか？ナルト」

ヒナタ「ナルト君？」

ナルト「…なんか…嫌な予感がする…サスケ、ヒナタ…神楽心眼(カグラシンガン)で感じるか？」

一人では気のせいではと思い二人にもしてもらう。

サスケ「っ！？」

ヒナタ「な、ナルト君…異様なチャクラが感じられる…」

ナルト「…その場所に行こう！サスケ！…ヒナタは三代目に連絡を！」

ヒナタ「はい！」

ヒナタは瞬身の術で三代目の屋敷に向かった。

そして、オレとサスケは異様なチャクラを感じた方向に向かった。

向かった先は血の匂いが充満していた。
サスケ「…父さん！母さん！」
サスケは一直線に自宅へ向かう。
オレはその姿を見送った。

ナルト「そこに隠れてないで…出て来い！」
オレは目の前を見る。
？「アレ？バレちゃいましたか？バレない自信はあったんだけどなぁ～」
そう言いながら姿を見せた。
ナルト「っ！？お前は！」
？「ん？見覚えがある感じかな？」
ナルト「…オレの両親を死に落としいれた奴だろ？」
？「へぇ～…誰に聞いたの？」
ナルト「オレの中にいる奴からだよ」
？「…アレ？禁句だったよな？」
ナルト「口寄せ・九弧（キュウコ）」
九弧【ナルト…どうした？…あー…】
九弧はナルト以外の奴をみて納得したようだった。
？「アレ？口寄せでるのか？」
九弧【なんでお前がいるんだ！】
ナルト「九弧、落ち着け！…なぁ…あんたは一体ここで何をしている？」
？「なぁにぃ…イタチに用があってね…話が終わった後、イタチは漆黒の闇に落ちただけだ」
ナルト「漆黒の闇？」
？「うちはでもないお前にいう気はない」
ナルト「…そうか…まぁ、興味ないから別にいい…そう言えば…お前の名前は？」
？「俺か？…マダラだ」

ナルト「そうか…もう会いたくないな」
マダラ「…なら死ぬか？」
ナルト「良いのか？…オレが死ねばお前の計画は無くなるぞ？」
オレがそう言うと、マダラはピクッと反応した。
マダラ「…今は手を出さないでおこう…じゃあ？ナルト」
マダラは消えていった。
九弧【…どうする？】
ナルト「さぁ？様子を見よう」
九弧【分かった】

その日、うちは一族は壊滅し、サスケだけが生き残った。

ナルト「…マダラ…オレの両親を死に落としいれた…犯人か」

5

うちは一族壊滅事件があった後、サスケは一人で過ごす事が多くなっていた。

ナルト「…ヒナタ、ちょっと良いか？」
オレはヒナタに話しかける。
ヒナタ「え？良いけど…どうしたの？」
オレはヒナタの手を取り、教室から離れた。

忍者養成学校（アカデミー）の屋上

ナルト「うちはの事件の日オレはサスケとうちは一族の屋敷がある方に向かっただろ？」
ヒナタ「うん」
ナルト「サスケは自宅に行った後、オレは…マダラと名乗る奴にあった…」
ヒナタ「マダラ？」
ナルト「オレの両親を死に落としいれた…犯人だ」
ヒナタ「え？」
ナルト「ヒナタ、オレは忍者養成学校（アカデミー）を卒業したら…ある場所に修業に向かうつもりだ…」
ヒナタ「一人で？」
ナルト「あぁ、でも、又戻る事を約束する」
ヒナタ「分かった」

ナルト「放課後、三代目にも言うつもりだ…一応、許可は貰わないとな」
そう伝えた後、一緒に教室に戻ると…キバたちにからかわれた。

放課後

授業が終わり、三代目の屋敷に向かう。
三代目の部屋の前に行く。
三代目「入れ」
ノックをする前に中から声がした。
ナルト「失礼します」
三代目「ナルトか」
ナルト「流石に遠眼鏡（トオメガネ）の術で見ておられたので…説明はいりませんよね？」
三代目「やはりバレていたか」
ナルト「はい…忍者養成学校（アカデミー）卒業したら…自来也さんを師匠に迎え、修業がしたいのですが」
三代目「自来也をか？」
ナルト「はい、綱手さんでも構いませんが…自来也さんは…四代目…ミナトさんの師匠だと知りましたので」
三代目は軽く考えた素振りをみせた。
三代目「…自来也は何処にいるか分からんぞ？」
ナルト「オレが卒業するまで時間はあります…それまでに宜しくお願いします」
オレは三代目に頭を下げた。
三代目「ダメじゃ」
ナルト「何故ですか？」
三代目「卒業＝下忍じゃ…下忍はスリーマンセルじゃからな」

ナルト「…」
三代目「…卒業までに自来也にはお主の気持ちを伝える…後は自来也が戻ってくるかじゃ」
ナルト「…影分身（カゲブンシン）」
小さい声でいうとオレは二人になった。
三代目「っ！？ナルト、何故禁術を」
ナルト「分身体を自来也さんに送ります…そして卒業する際に分身体を解きます」
三代目「…では、本体は出ないと？」
ナルト「はい…出ません」
三代目「ふぅ…分かった…しかし、自来也は…何処におるか…今は不明だからのぅ」
ナルト「…修業ついでに、探します…」
三代目「…分かった…しかし、本体が里から出る事は許さん」
ナルト「了解です…三代目、オレはこれで失礼します…後、九尾から忠告ですが…”面を被った奴には気をつけろ”と」
オレは三代目の屋敷から立ち去った。
三代目「面を被った奴？」
三代目はオレの背中を見送りながら小さく呟いた。

三代目の屋敷から出た後、オレは分身体2体を里の外へ出す。
1体は自来也さんの元へ。
もう1体は砂隠れへ向かわせた。

その後、ヒナタのトコに行き、三代目との会話を伝える。
ヒナタ「じゃあ、里からは出ないんだね？ナルト君は」
ナルト「あぁ、分身体を外に出したけどな」
ヒナタ「了解」
ナルト「これからサスケの様子を見に行くけど、ヒナタも来るか？」

ヒナタ「私は…これから父上と修業だから…ごめんね」
ナルト「分かった…頑張れよ」
ヒナタ「うん、ありがとう」
その後、サスケの元へ向かう。

うちは一族が住んでいた場所に行くと…ただ一人サスケの姿が見えた。

ナルト「サスケ」
オレはサスケの後ろから呼びかける。
サスケ「…ナルトか…何の用だ？」
振り向くサスケは空っぽの人形のようだった。
ナルト「お前にもう一度聞きたくてな」
サスケ「何をだ」
ナルト「…お前の夢はなんだ？」
怒りに満ちた顔で答えた。
サスケ「…イタチを…兄貴を殺す」
サスケは静かに言った。
ナルト「…復讐って事か」
サスケ「あぁ」
ナルト「復讐した後はどうするつもりだ？」
サスケ「復讐した後？…オレは…」
ナルト「サスケ…オレは両親が居ないのは知っているな？」
サスケ「あぁ」
ナルト「オレの両親を死に落としいれた犯人…この間…いや…イタチさんが抜けた日…此処で会った」
サスケ「え？」
ナルト「そいつは…内容は知らないけど…イタチさんに何かを言ったらしい…その後、事件が起きた」

サスケ「…そいつの名は？」
ナルト「…分からない…しかし、暗部の人間がつけていない”渦巻き上の面をしていた」
オレがそう言うと、サスケはオレに背を向けた。
ナルト「サスケ…オレは復讐しない」
オレの言葉にサスケはまた振り向いた。
サスケ「何故だ？」
ナルト「復讐しても…失った両親は帰ってこないからな…代わりに…両親が安心するような人間になりたいと思っている」
サスケ「安心するような人間」
ナルト「あぁ…ソレがオレの夢でもあるからな」
サスケ「…」
ナルト「じゃあな！サスケ！今日はそれを言いにきただけだ」
オレはサスケの処から離れた。

翌日、サスケは事件があった前のサスケに戻っていた。

6（分身体Ａ）

自来也さんを探す為に里を出た分身体Ａです（笑）
※ダイジェストで進みます。

里から出て直ぐに、知らない人に殺されそうになりました！
まぁ、取り敢えず体術で対応した。
（チャクラを右手に集めて殴っただけ）

…まぁ、死んではないだろうなぁっと思いながらその場を後にした。

その後、色々な里を巡りながら、自来也さんを探していた。

途中、今は滅んだ滝隠れの里に行き、うずまき一族の墓を参ったりして進んだ。
※その時、うずまき一族の資料とか巻物とか探し…そして拝借した。

後、野宿をやめ、宿を探していると…”覗き魔”がいたので…チャクラを右手に集めて殴り飛ばした。
※自来也さんとは気付かず（汗）

自来也「なんじゃ！いきなり！」
ナルト「覗きは犯罪ですから」
自来也「コレは犯罪じゃない！取材じゃ！」
ナルト「何が取材ですか！覗き穴で見ていたでしょ！」
自来也「良いだろうが！」
ナルト「ダメでしょ！ってか…アレ？…貴方は？」
何故か見覚えがあった。
自来也「ワシか？ワシは…自来也じゃ！」

ナルト「…四代目の師匠？」
自来也「四代目？…ミナトの事か？」
ナルト「はい！オレはうずまきナルトです」
自来也「お主が…ワシに何の用だ」
ナルト「…先ほどは殴ってしまいすみません！…あの…オレに修業をつけて下さい！」
自来也「何故ワシがお主に修業つけなきゃいかんのじゃ！」
ナルト「…オレは四代目である父・ミナトさんのように貴方に修業をつけて欲しいからです」
オレは自来也さんの目を見て言った。
自来也「…何故、ミナトがお主の父だと分かる？」
ナルト「オレの中にいる奴から聞きました」
自来也「っ！？…どうやって？」
ナルト「…口寄せ・九弧（キュウコ）」
九弧【ナルト…何の用だ？って…自来也か】
自来也「っ！？”九尾の妖狐”！？」
九弧【違う！俺様は九弧だ！】
ナルト「自来也さんも間違えますか（笑）…この九弧はうずまき一族と古くから契約している獣です」
自来也「ほぅ」
ナルト「九弧から”九尾の妖狐”の事やオレの両親、師匠・自来也さん、封印術など聞きました」
自来也「契約封印（ケイヤクフウイン）は？」
ナルト「やりました！…後、”九尾の妖狐”とも和解しています」
自来也「っ！？和解だと！」
ナルト「はい」
自来也「ならワシから教える事は無いだろう？」
ナルト「あります」
自来也「何があるんじゃ！」
ナルト「…オレはまだ弱いです！人としても、忍びとしても…それ

に…オレは…父のような忍びになりたい！」
自来也「…分かった」
ナルト「本当ですか？」
自来也「あぁ」
ナルト「有難うございます！」
まぁ何はとうあれ自来也さんに修業を見てもらう事になりました。

修業の日々

最初は螺旋丸の基礎を教わったりして、より精密にコントロール出来るようになりました。
後、体術を教わりました。
チャクラを集めなくてもある程度の力で攻撃出来るようになりました。
そして、座学も…忍者の歴史を教わったり、色々な里の情報などを教わりました。
忍術も同じく基礎から応用が効く技も教わりました。
コミニュケーション力も情報収集能力も向上させました。
自来也さんに修業をみてもらい3年が経ち、漸く本体に戻る日。

ナルト「自来也さん、3年間ありがとうございました！」
自来也「何構わんよ」
ナルト「…またいつか…いや…いずれ又お会いする日まで」
自来也「あぁ」
立ち去る際、言い忘れていた事をいう。
ナルト「…自来也さん。蛇と面について”気を付けて”下さい」
そう言い、オレは本体に戻っていった。
ただ一人その場に、自来也さんだけは立ち尽くしていた。

自来也「蛇と面？」
首を傾げる自来也は情報収集の為その場を後にした。

7（分身体B）

砂隠れの里に向かう為に里を出た分身体Bです（笑）
※ダイジェストで進みます。

里を出て歩いていると…何処からか人が飛んできた。
ナルト「ワォ！なんで？」
男の顔は赤く腫れていた。
ナルト「…んー、どうしよう？」
考えていると知らない男がクナイを投げてきた。
ナルト「ワォ！いきなり何すんのさ？」
しかし、男はオレに向かって攻撃を仕掛ける。
ナルト「はぁ…仕方ないな…風遁（フウトン）・ミニ螺旋手裏剣（ラセンシュリケン）」
オレは男に攻撃をした。
倒れた男をそのままにし、砂隠れに向かった。

その後、砂漠に入り…砂あらしにあって足止めをくらう。
ナルト「…」
九尾【ナルトよ】
ナルト（ん？九尾か？どうした？）
九尾【何故、飛雷神（ヒライシン）の術を使わん？】
ナルト（場所が把握出来ていないからな…）
九尾【そうか】
砂あらしが去った後、砂隠れに急いだ。

砂隠れ到着

その後到着してから警備の忍びに連れられ風影の元へ通され、我愛羅、テマリ、カンクロウを紹介された。
ナルト「宜しくお願いします」
テマリ「あぁ」
カンクロウ「宜しくじゃん」
我愛羅「…」ペコ
我愛羅はお辞儀するだけだった。

それから毎日、オレは我愛羅と過ごした。
我愛羅はオレと同じで暗部に見張られていた。

ナルト「風影様…今日、我愛羅と一緒に寝てもいいですか？」
オレの申しでに風影や砂の上役が驚いていた。
風影「…あぁ」
ナルト「有難うございます」
オレは我愛羅の元へ走っていった。

ナルト「我愛羅！今日、一緒に寝ても良いって！」
我愛羅「え？」
ナルト「だから、遅くまで一緒にいられるんだよ！」
我愛羅「ほ、ほんと？」
ナルト「うん！」
その日、オレは我愛羅と同じ布団で寝た。
我愛羅が寝ている時に、我愛羅の精神空間に入り込み陰封印（インフウイン）と四象封印（シショウフウイン）を施した。

翌朝、オレは我愛羅を連れて公園で遊んで過ごした。
テマリ「我愛羅、ナルト…私も混ぜてくれ」
ナルト「テマリ姉ちゃん！」

我愛羅「…」コクン
その日、テマリと我愛羅と三人で遊び過ごした。
夜は、我愛羅はきちんと寝ているようでクマはなかった。
暗部の人の目をぬって、我愛羅と秘密修業を行ったりして過ごし、
3年の月日を充実に経過していた。

そして、本体に戻る日、オレは我愛羅と並んで歩く。
我愛羅「お別れ？」
ナルト「でも、近い内に会えるから永遠の別れじゃないよ？」
我愛羅「…今まで有難う」
ナルト「オレこそ有難うな！我愛羅！」
握手を交わしオレは…その場から消えた。

8（精神空間）

うちは一族の事件が終わり、サスケも元のサスケに戻ったある日、オレは一人で碑の前に立つ。
ナルト「…」
オレは”あの日”の事を只々思い出していた。

ナルト（…父さん…母さん…オレが死ねば…”九尾の妖狐”はこの世から永遠に消える…そうすれば…”平和”なんだよな？）
九尾【ナルト】
ナルト（九尾か…どうした？）
九尾【前に教えたと思うが…ワシを封印する前に…】
ナルト（分かってる…でも…）
九尾【ミナトやクシナに会いたいか？】
ナルト（あぁ）
九尾【会わしてやれるぞ？】
ナルト（え？）
九尾【今夜、精神空間に来い】
ナルト（…分かった）

その夜、オレは自分の精神空間に入り…”九尾の妖狐”の元へ
九尾【来たか】
ナルト「九尾…父さんたちに会えるのか？」
九尾【あぁ…ワシを封印する時に尻尾が８本出た時に会える仕掛けをしていたからな】
ナルト「そんな仕掛けがあったのか」
九尾【あぁ…しかし、ナルトお前はワシを四象封印（シショウフウイン）し直しただろう？…それによって会えないでいた…今回は特別だ】
ナルト「ありがとな！九尾！」

オレが礼を言うと九尾は照れたのかそっぽを向いた。

そして、オレの後ろから呼ばれる。
？「ナルト」
振り向くとオレと同じ容姿の男の人と紅く真っ直ぐ伸びたロングヘアの女の人が立っていた。
ナルト「父さん…母さん？」
？「ナルト！」
女の人が抱きついてきた。
男の人は静かに微笑んでいた。
ナルト「か、母さん」
？「ナルト！ナルト！…ずっと…会いたかった」
女の人は泣きながら言う。
九尾はその様子をみて小さい声で…
九尾【クシナ…苦しいと思うぞ？離してやれ】
クシナと呼ばれた女の人は「え？」っという顔でオレをみる。
九尾のいう通り、オレの体は強い力のせいで苦しがっていた。
クシナ「あ…ごめんってばね！ナルト！」
クシナさんは慌ててオレを離す。
ナルト「べ、別に大丈夫ってばよ」
ミナト「ナルト」
ナルト「はい！」
オレは父・ミナトをみる。
ミナト「大きくなったね」
ナルト「んー？でも、オレ…クラスで一番チビだよ」
ミナト「俺やクシナは赤ちゃんのナルトしか見ていないからね」
ナルト「あ…そっか…ごめんなさい」
ミナト「ナルトが謝る事はないよ…悪いのは…」
ナルト「父さん…あいつに会った」
ミナト「っ！？」

クシナ「何もされなかった？」
ナルト「あぁ…でも、うちは一族がイタチさんによって…壊滅した…その前にイタチさん…あいつにあったらしい」
ミナト「三代目には？」
オレは横に首を振った。
ナルト「簡単にだけ」
ミナト「…ナルトはどうするんだい？」
ナルト「…今は様子を伺うしか出来ない…一応、自来也さんには伝えた方がいいかなっては思っています」
ミナト「…自来也先生か…お会いしたのか？」
ナルト「オレの分身体を向かわせました」
ミナト「…」
ミナトさんは考えているようだった。

クシナ「何にせよ…ナルトが無事で良かったわ！」
ナルト「心配かけました」
クシナ「何言ってんの！親子じゃない！気にしないでよ！」
ナルト「ありがとうございます」

ミナト「ナルト」
ナルト「はい」
ミナト「僕とクシナはこれからずっと九尾とナルトの精神空間にいる…たまに報告してくれるかい？」
ナルト「本当ですか！…勿論！報告します！」
クシナ「また会える時があるのね！」
ミナト「この事は誰にも言わないようにね？」
ナルト「はい！…また…来ます」
ミナト「待っているよ…ナルト」
ミナトさんとクシナさんは微笑みながらオレを優しく見送ってくれた。

そして…精神空間から出た。

9（暗号？）

精神空間から戻るとまだ、夜中だった…神楽心眼（カグラシンガン）で周りのチャクラを確認すると屋根裏に二つのチャクラを感じた。

ナルト「…喉乾いた」
ややわざとらしく呟く。
ソファから立ち上がり、台所へ向かう。
ナルト「…んー…はぁ…」
背伸びをして冷蔵庫から水を出しコップに注ぐ。
水を冷蔵庫に戻しコップを持ってソファに戻る。

ナルト「…三代目に頼みたい事があるんですが…暗部のお二方…下りてくれませんか？それとも”根”の人ですか？」
暗部「っ！？」
ナルト「驚いているか？…正直言ってオレは最初からお二人の事を知っていますよ」
オレがそう言うと一人が姿を現した。
暗部「…」
ナルト「どうも…名前聞いてもいい？」
暗部「…銀狐（ギンコ）」
ナルト「銀狐か…宜しくお願いします（笑）」
オレは軽く頭を下げる。
銀狐（ギンコ）「三代目様に伝える事は？」
ナルト「”四”は”中”に在する…そう伝えて下さい…それで分からないのなら…話す事は無いと」
銀狐（ギンコ）「分かった…伝えておく」
銀狐（ギンコ）が姿を消そうと背を向けた。
ナルト「銀狐（ギンコ）…いつも屋根裏にいるよね？」

銀狐(ギンコ)「いつから知っていた？」
振り向かず銀狐(ギンコ)は問う。
ナルト「いつからだと思いますか？」
ニコッと笑いかける。
銀狐(ギンコ)「…」
銀狐は黙った。
ナルト「…銀狐(ギンコ)…”四”は”面”を知る…”面”は”眼に力を持つ者”…”蛇”が捉える…」
銀狐は首を傾げ、その場から三代目の屋敷に向かっていった。
ナルト「…じゃあ、おやすみ」
見送りながら、眠りについた。

三代目の屋敷

銀狐はオレが言った言葉を一言一句間違えず三代目に伝えた。
三代目「…”四”は”中”に在する…”四”は”面”を知る…”面”は”眼に力を持つ者”…”蛇”が捉える…ナルトはそう言ったのだな？」
銀狐(ギンコ)「はい」
三代目「眼に力を持つ…日向かうちは…のどちらかを指しておるだろうのぅ…蛇…あやつしか思い浮かばんのぅ」
銀狐(ギンコ)「…四は…四代目では？」
三代目「では…中はなんじゃと？」
銀狐(ギンコ)「…ナルトの中…とか」
三代目「…では、ナルトの中に四代目は存在する、四代目は”面”を知っている、”面”は日向かうちはのように眼に力を持つ者で蛇…が捉える？」
銀狐(ギンコ)「面について探ってみます」
三代目「頼む」

銀狐は姿を消した。
三代目「…ナルト、お主は何を知っている」
三代目は先代の顔岩を見て呟いた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1694ba/

うずまきナルト物語

2012年1月14日10時45分発行